
News Letter

No.8 2002年 4月

日本環境工学教授協会
Japan Association of Environmental Engineering Professors

目次

顧問寄稿：古稀の旅路を顧みて	2
顧問寄稿：近況報告	4
大学・高専ニュース	5
平成13年度会費納入について	8
入会のご案内について	8
平成14年度 E-mail 総会（評議員会・理事会、総会）の開催案内	8
特集：平成13年度 博論・修論・卒論タイトル	9

古稀の旅路を顧みて

早稲田大学名誉教授 工学博士

顧問 遠藤 郁夫

春の宵のひとつ、大学卒業後 40 余年ぶりに 15 人が集った。置かれた環境は異なるが、体力的には十分元気だ。日本は WHO の「健康寿命」国際比較(00年)でも、平均寿命 74 歳と世界のトップクラスにあたる。

私は早稲田大学を 2001 年 3 月に定年退職いたしました。教育と研究に携わって 40 有余年間(著書・論文・調査研究報告書等 141 編、遠藤郁夫博士古希記念論文撰集・参照)いつの間にか、私自身もそんな年になってしまったのである。「幸福な退職」者なのであると熟々感じさせられた昨今である。

河水少年過
浅学白髪多
残軀天所赦
不役此如何

対河(遠藤郁夫)

私の人生に大きな影響を与えたのは、20 歳前後から、健康管理に悩まされてきた状況から、漸く開放されようとしていたその時でした。私は昭和 5 年(1930 年)9 月 29 日生れですから、20 歳代は 1950 ~ 1960 年代前半と重なります。この時期は日本とアメリカとの間で安保条約と行政協定改定のための調印(1960 年 1 月)国会での批准(1960 年 7 月 2 日成立)という、日本の社会を大きく揺るがした安保騒動から幕が開かれました。この騒動は全国的な動きに発展したにも拘らず、安保条約の改定の阻止ができなかったので、多くの一般市民、学生共々深い挫折と虚脱感におそわれていたときでした。これら、

社会や健康状態の影響を深く受けていたのでしょうか、つねづね、人生観として「自分を信じ、自分の責任で、自分の健康とそれに応じた能力で社会に出て活躍しよう、更に周囲に迷惑をかけないためにも、自分の専門を生涯、生業とすることのできる生き方」を選ぼうとしているときでした。

折も折、昭和 35 年(1960 年)4 月、広瀬孝六郎先生が、東京大学から東北大学に就任され、私が直接指導を受けることになりました。私と先生との御縁の始まりでした。当時の先生は、国際水質汚濁研究会議・日本代表理事であると共に、第 2 回国際水質汚濁研究会議開催(昭和 39 年 8 月、会長)のための準備で学会・協会・関係業会などの、委員会並びに打ち合せ等で多忙な日々を送る毎日でした。

このようななかで、広瀬孝六郎先生の研究指導、セミナー(研究室・水曜会・東京)など、更に第 2 回国際水質汚濁研究会議主論文の発表、その後における中国、台湾、米国、フランスおよびイギリス等との学术交流など、ドラマチックなエピソードは、水のごとく忘却の彼方に押し流されてゆく時の中で、終生私の追憶として脳裏に残ることとなりました。

師は厳にして然る後に道尊し

礼記・卷 18

ははたく いえど
母啄すと雖も、

その子の啐そつを致いたす能あたわず。

子啐すると雖も、

母の啄たくを致そつす能たくわず。

各々相知らず。啐啄そつたくの時に当って、

是れ誰か同ともに啐啄する。

碧巖録・第 16 則

環境や個人差はあるが、20歳前後から30歳ぐらいまでは、どのような職業を選択するにせよ、この多感なる青春時代を正直に、勤勉に、しかも緊張感をもって生きてきたかどうか、その人間の生き方を左右する重要な時期とも考えられます。私にとって、20歳代は私という「自我」すなわち、自立的意志を形成するために必要な結晶核となった、人との出会い、交流が育まれた時でもありました。それ以降において、とりわけ自分らしい生き方を貫けるかどうかの分岐点ともいえる時ではないでしょうか。

われわれの世代の多くは、安保騒動、大学闘争に大なり小なりかかわりながら、ひたすら日本社会の成長神話を信じ、それぞれの立場で活動してきた世代でもある。

このような社会変動の推移に押し流されながら、40有余年の教育と研究生生活の間に、折にふれ見聞したこと、自分自身について聞かせたことなどのうち、最も感銘を受けた、取りとめのない一つのメモを以下に記してみた。すなわち、

工学の学問分野の研究はどこまでも実験による研究である。よい研究とは独創的な研究のことである。しかしながら、研究は独創的である前に、まず論理的でなければならないだろう。

独創性の研究をするためには、独自の研究をやりながら、人の論文をたくさん読むべきである。何も研究しないで他人の論文ばかり読むのは、独創性をにぶらせ勝ちになる。しかしながら、ものを知らなくては何も産み出すことはできないのである。

天才の代名詞とも云えるアインシュタインが、1905年（26歳）に発表した特殊

相対性理論の論文には、参考文献は一つも載っていないという独創的なものであったという。たくさんの文献を引用し、それでやっと重箱の隅を突つような成果しか上げられない凡百の論文と天才の論文とでは、比べようもないが、ものを知らなくては何も産み出すことのできない私達、並びに若い研究者達が、沢山の論文を読むことは避けて通れない修業ではないかと思いつく思ふ次第である。

弟子が師匠に、衣裳合せするような弟子はろくな弟子ではない。そのような弟子しか作らない師匠はよい師匠ではないだろう。息子にとって、親爺が競争目標であるように、弟子にとって師匠は競争目標でありたいと願ってきましたが、自らの力不足を痛感している次第である。かつてに老優尾上松助は、

‘ 役者ってものは、いつも生きがよくなくっちゃいけねえ ’

とよく言っていたそうである。役者も学者も、同意義語的共通項が多い。心身をいつも生き生きと保ち、命の続く限り、机を離れても、活動的エネルギーが産み出せるように。

われわれの研究対象は無数にある。その中から何を選びだし、どのような命題を掘り下げるのかが問題である。確かに、私も研究には運不運はあると思う。しかしながら、テーマが見つかりさえすれば、努力によって必ずそれなりの曙光は見えてくる。教育者として、そのように信じたい。研究・教育者として最も辛いことは、全身全霊で打ち込めるようなテーマが見つからないことであろう。

最後に日本環境工学教授協会のひたむきな御盡力に満腔の謝意を表するとともに、益々の発展をお祈りいたします。

近況報告

顧問 花嶋 正孝

私は平成14年、71歳を迎えました。お蔭様にて、首から上はかなりボケが進んでおりますが、首から下は元気で朝7時半に福岡市の家を出て、北九州まで2時間を使って通勤を続けております。

平成13年3月に福岡大学を退職し、4月からは福岡県リサイクルセンターと北九州市のエコタウンセンターの二足のわらじを履いております。

福岡県リサイクルセンターは福岡県を中心とする中小企業を対象に廃棄物をリサイクルする企業の技術と企業化を支援する組織で16名で構成されております。

一方、北九州市エコタウンセンターはエコタウン企業化の一環として、ビジネスが行える企業の一步手前の企業を実証研究で支援する機関です。北九州市のエコタウンの特徴として、学術研究都市として、大学・研究所群を一か所に集中させ、将来ビジネスになり得る技術を開発するシーズを提供する研究群と、それを実証する研究群を管理するエコタウンセンター、これを卒業してビジネスとして成長した企業の集まりである総合エコタウンの3本柱を立てて他の都市のエコタウンと差別化を図っている。

私は北九州の学園都市にある県のリサイクル研究センターに居る事が多いが、北九州の響灘(学園都市から車で20分、距離的には20km)にあるエコタウンの実証研究の誘致とその施設開発にも力を入れている。

県のリサイクル総合研究センターは、循環型社会を一日も早く福岡県に定着させるために、循環型社会の入口と出口のシステムを中小企業とともに完成させる

ことが、重要な仕事である。この中で最も困難なのは出口即ち、リサイクル物がスムーズに一般市場に流通することである。

北九州市のエコタウンが日本のリードオフマンとしての役割を果たしており、年間5万人もの見学者があることが関係者の励みになっている。

私が関係している、エコタウンセンター(実証研究エリア)も平成10年に開設以来3年間で、21施設が開設された。平成10年に私が関係した福岡大学の資源循環・環境制御システム研究所が中心になり、まず資源をリサイクルするにあたり、それから発生する環境影響を十分コントロール出来ることを証明する施設を作り、そのための実証研究を行うことにした。

ここでの実証研究としては、次世代の水処理の研究、飛灰や浸出水中に含まれるダイオキシン類を処理する研究や、それらを安全に最終処分をするための研究、リサイクルの実証では生ごみからの生分解性のプラスチックを製造する技術、オカラを乾燥して新しい食品等を造る研究、プラスチックの分別によりその原料となるペレットを造る実証研究等、かなり手広く研究を行っている。

今後これらの実証研究施設が、若い研究者の生きた教育施設としてその整備発展に役立つよう、残された人生を捧げて行きたい。

大学・高専ニュー・ス

1) 環境関連教育組織の改組、計画等

東北学院大学

東北学院大学工学部土木工学科は4月より環境土木工学科に改称

(文責：石橋良信)

京都大学

平成14年4月に京都大学地球環境学大学院が発足。それに伴い2分野が環境工学専攻から異動(人事参照)。そのうち1分野は、新大学院と工学研究科環境工学専攻の両方に分野を持つ「流動」の扱いとなる。

環境工学専攻の改組については他専攻と共に議論中であり、来年度には新専攻体制が発足する予定である。

(文責：藤原健史)

2) 人事

大阪大学

立田真文「大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻・助手」「富山県立大学短期大学部・助教授」(4月1日より)

(文責：藤田正憲)

愛媛大学工学部環境建設工学科
都市環境工学講座・水環境工学研究室
教授・渡辺政広、講師・西村文武

(文責：渡辺政広)

京都大学

<平成13年度の人事異動>
(6月1日)

山敷庸亮助手(新任・大気・熱環境工学分野、(財)国際湖沼環境委員会(ILEC)/UNEP-

IETCより)

(7月1日)

岸本直之講師(助手から昇任・環境工学専攻水環境工学分野)

(10月1日)

松田知成助教授(助手から昇任、環境質制御分野から環境デザイン工学講座へ異動)

(11月1日)

越川博元講師(助手から昇任、環境デザイン工学講座から環境質評価分野へ異動)

(12月1日)

藤井滋穂教授(助教授から昇任、環境工学専攻水環境工学分野から環境質制御分野へ異動)

(3月1日)

高岡昌輝助教授(助手から昇任・環境工学専攻都市代謝工学分野)

(3月16日)

大下和徹助手(新任・環境工学専攻都市代謝工学分野、日本ガイシ(株)より)

(3月31日)

住友恒教授・・・定年退官(環境工学専攻都市衛生工学分野)

宗宮功教授・・・定年退官(環境工学専攻水環境工学分野)

<平成14年度当初の人事異動(4月1日付け)>

伊藤禎彦教授(助教授から昇任・環境工学専攻都市衛生工学分野)

渡邊信久助教授(新任・環境工学専攻環境保全工学分野、大阪市立環境科学研究所より)

日高平助手(新任・環境工学専攻水環境工学分野、京都大学大学院工学研究科博士課程3年修了)

村山留美子助手(新任・環境工学専攻環境衛生学分野、国立公衆衛生院より)

津野 洋教授(環境質評価分野から水環境工学分野へ異動)

武田信生教授、高岡昌輝助教授、大下和徹
助手の異動

環境工学専攻都市代謝工学分野から
環境デザイン工学講座へ

<地球環境学大学院への人事異動(4月1
日付け)>

内藤正明教授が地球環境学学長に就任

松井三郎教授、松田知成助教授、内海秀樹
助手の異動(固定教官)

地球環境学学・地球親和技術学廊・環
境調和型産業論分野へ

松岡 譲教授、藤原健史助教授、山敷庸亮
助手の異動(流動教官)

地球環境学学・地球益学廊・環境統合
評価モデル論分野へ

(文責：藤原健史、高岡昌輝)

大阪産業大学

菅原正孝 人間環境学部教授：同学部学
部長に就任

寺島 泰 人間環境学部教授：大阪産業
大学産業研究所所長に就任

(文責：尾崎博明)

東京大学

<工学系研究科、工学部>

平成14年4月1日付けで大垣眞一郎教授
が工学系研究科長、工学部長に就任

<工学系研究科社会基盤工学専攻>

平成14年3月31日付けで玉井信行教授
が定年退官

<工学系研究科附属水環境制御研究セン
ター>

平成14年4月1日付けで花木啓祐教授が
センター長に就任(併任)

<新領域創成科学研究科環境学専攻>

平成14年3月20日付けでアジア工科大
学院(タイ)に佐藤弘泰助教授が赴任

(文責：中島典之)

宮崎大学

土木環境工学科

採用：関戸知雄助手(北海道大学より)
(文責：土手 裕)

北海道大学

寄附講座「循環資源評価学(タクマ)講座」
客員教授 田中勝(岡山大学環境理工学
部教授)

客員助教授 角田芳忠(株式会社タクマ)
(文責：松藤敏彦)

3) シンポジウム・講演会等の開 催予定、実施したケ-スの特記 事項

大阪大学

大阪大学-ベトナム国立大学間の拠点大
学方式学術交流における日越合同セミ
ナーの開催。

平成13年6月5日：ベトナム国立大学ホ-
ーチミン校において「2001年地下水汚染に
係る日越ワークショップ」を開催した。地
下水汚染問題を主題として、地下水汚染
の現状、モニタリング手法、汚染浄化対策
技術などについて研究発表が行われた。
日本側から8名、ベトナム側から38名の
研究者が参加した。

平成13年11月7日：大阪大学(阪大銀杏
会館)において、セミナー「都市と沿岸部
の開発に関する環境科学技術」を開催し
た。ベトナムにおける地下水、土壌、大気
などの汚染状況のモニタリング、汚染対
策としての廃棄物処理技術、環境修復技
術の開発、都市域や海岸線・河口の調査と
今後の整備指針の提案等についての共同
研究の結果や経過が報告された。日本側
から35名、ベトナム側から21名の研究者
が参加した。(文責：藤田正憲)

東海大学

2002年6月12、13日の両日、東海大学湘南校舎にて、日本オゾン協会主催の第12回年次研究講演会を開催します。皆様のご参加をお待ちいたします。なお、交通手段は小田急線「東海大学前」下車、徒歩10分(新宿から急行で約70分)、またはJR東海道線「平塚」下車、「東海大学行き」/「秦野駅行き」バスで約30分です。宿泊は小田急線秦野駅付近または本厚木駅周辺のホテルが便利と思います。

(文責：茂庭竹生)

大阪産業大学

「大阪産業大学2002年日中環境フォーラム」(2002年6月27日・28日)

会場：大阪産業大学

(大阪府大東市中垣内3-1-1)

2002年6月27日

シンポジウム：

国際大都市(大阪・上海)の環境問題とその連携を考える

基調講演やパネルディスカッション

主催：大阪産業大学

共催：上海交通大学、上海市政府環境保護局、(財)地球環境産業技術研究機構など

後援：大阪府、大阪市、大東市など

2002年6月28日

セミナー：

「産学提携による環境技術の共同研究の可能性を探る」

「上海市の最新環境保護事業計画と環境産業育成策」など (文責：尾崎博明)

北海道大学

第10回衛生工学シンポジウム

開催日程：2002年10月31日、11月1日の2日間

会場：北海道大学学術交流会館

(文責：松藤敏彦)

京都大学

環境衛生工学研究会 第24回総会・シンポジウム・懇親会の開催

日時 平成14年8月1日(木)

会場 京大会館

(京都市左京区吉田川原町15-9、
TEL 075-751-8311)

問合先 原田茂樹助手

(TEL 075-753-5929、FAX 075-753-5066)

ホームページ

<http://www.env.kyoto-u.ac.jp/kyoeiken>

(文責：藤原健史)

4) 教育上の特別な計画

日本大学生産工学部

来年度より、JABEE対応コースをスタートする予定。(文責：大木宜章)

京都大学

平成14年度には京都大学のオープンキャンパスが企画されている(詳細は未定)開催されれば、地球工学科(学部)および環境工学専攻も参加する。

(文責：藤原健史)

平成13年度会費納入について

平成13年11月に平成13年度会費を会員の皆様にご請求させていただきましたが、もし未納の方がおられましたら、早急に納入下さいますよう、お願い申し上げます。振込用紙等ご紛失の際には、事務局までご連絡ください。

入会のご案内について

周りの方でまだ当協会に入会されていない方おいでになりましたら、ご紹介下さいますよう、お願い申し上げます。

事務局までE-mail、その他でご連絡くだされば、ご本人宛に入会案内を送付させていただきます。

平成14年度 E-mail 総会 (評議員会・理事会、総会)の開催案内

日本環境工学教授協会 平成14年度の評議員会・理事会、総会をE-mailにて下記の日程で開催いたしますので、どうぞよろしくお願いいたします。

理事会・評議員会

平成14年5月28日(火) 9:00

～平成14年5月29日(水) 11:00

総会

平成14年5月31日(金)

13:00-17:00

日本環境工学教授協会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学大学院工学研究科環境工学専攻内

日本環境工学教授協会事務局

TEL : 075-753-5171、5169

FAX : 075-753-3335

E-Mail : jaeep-office@eden.env.kyoto-u.ac.jp

ホームページアドレス :

<http://jaeep.env.kyoto-u.ac.jp/>